

大学の世界展開力強化事業（平成23年度採択）中間評価結果

大学名	国際教養大学
タイプ	B-I
構想名	「日米協働課題解決型プロジェクト科目」の導入と「日米教員交流プラットフォーム」構築

◇大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価

(総括評価)	当初目的を達成するには、助言等を考慮し、より一層の改善と努力が必要と判断される。
B	
(コメント)	<p>国際教養大学は国際化及び国際学生交流において、これまで優れた実績を上げており、本プログラムを遂行するための基盤が整備されている。その強みを活かしながら、更に独自の国際教育を発展させるために、本プログラムを通して先導性の高い取組を行っている。日米の大学が協働して課題解決型プロジェクト科目（PBL 科目）を実施し、その効果を上げるために日米教員協働プラットフォームを構築するという本プログラムの中核となる取組において、一定の成果を上げていることは評価できる。</p> <p>一方で、本プログラムの計画に対する取組状況や目標の達成状況に関しては、随所に遅れや変更が見受けられる。特に PBL 科目の開講について、当初連携を計画していたオレゴン州立大学機構（OUS）に属する7大学のうち、オレゴン州立大学との間では留学と関連付けて実施できる基礎が出来上がっているものの、他の6大学とは実施できておらず、連携先として OUS 以外の大学の追加や留学を伴わない学内完結型の PBL 科目の新設など、当初計画とは異なった実施形態になっている。また、OUS 以外の大学と PBL 科目を急遽実施することにしたため、本プログラムの実施における実務面（連携大学とのスケジュール調整や学生募集など）での遅滞も散見される。</p> <p>学内完結型の PBL 科目については、留学と関連付けた PBL 科目を補完するものとして一定の効果は認められるものの、当初計画に盛り込まれておらず、また、本事業の趣旨に照らしても、代替できるものとは言えない。したがって、学生交流の実績として、留学と関連付けた PBL 科目を履修した学生数よりも学内完結型の PBL 科目を履修した学生数が多くを占めるような現状は好ましくない。</p> <p>申請時の構想の理念、目的、目標に立ち返り、全学を挙げて本プログラムの遂行に取り組むことが求められる。</p>